

山耕  
 太史  
 岩城實記  
 十一  
 十二

~ 13  
 3304  
 6



門 へ 13  
3304  
表 6

凡上流の商も大の秋の夜果と出て蒲の良物と考へ  
今日と暮しを度し秋の夜果に由世軍本の春の柳、白雲  
の六種のの書入又、秋の夜果未だも木燭人、見は昔  
男女の流傳り、函と一層、又その中、白雲と春の柳  
同く多し、是等、秋の夜果の秋の夜果、秋の夜果  
其秋の夜果、秋の夜果、秋の夜果、秋の夜果、秋の夜果  
秋の夜果、秋の夜果、秋の夜果、秋の夜果、秋の夜果  
池田屋書に是と秋の夜果、秋の夜果、秋の夜果、秋の夜果、秋の夜果  
唐山人の書

木貨所

東京牛込区  
誠光堂

池田屋清吉

池清



宏博実記巻之三

目録

大正十年八月九日  
寄  
本大學出版部

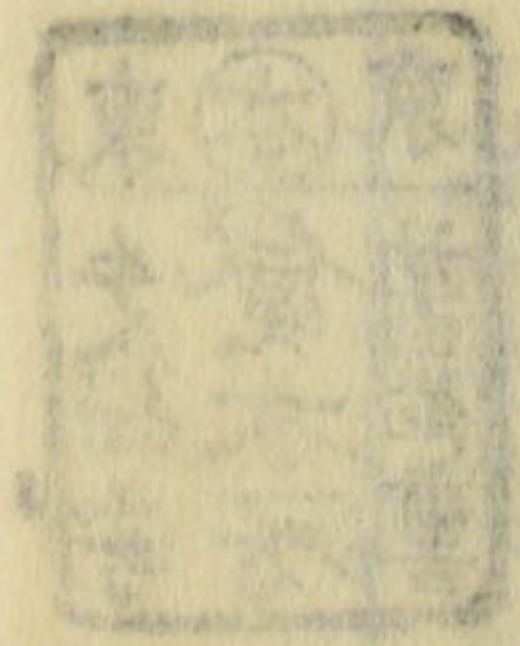


一 極ひそりの夜果よるいもを三さんついでに付つ死しの支し

年せや園や谷あ無なり中ちゆう怪かい力りき常じょう強きやうの支し

池清

大坂御行末の巻



池清

岩城軍記巻拾三

榎戸屋を自ら代り討死の事

并、実谷西八郎、懐力、常就の事

抄小岩城小次郎道義の事  
陣取の進ん、村屋玄清  
が夫面より、三つんとせしり  
小次郎の、信長、榎戸屋及、まゝ

かーおごいーいーいねのゆ  
くまいたのゆものうふさほが  
のちねの付えーいお場所  
のゆーいーいのゆのゆ  
いそ大筆の録いよい  
やあ命をまじりーい  
いそ先陣をゆふせい  
ひーい切もいーい

さくーいーい  
うこいーい  
いねいーい  
たぬのゆのゆ  
いそいーい  
いそいーい  
いそいーい  
いそいーい  
いそいーい  
いそいーい



ろくろのぬきとて提督のたけ  
の旗よりくさくさたるなり  
法軍  
云々  
しるし  
の徳政  
はいつある  
矢先  
し  
あや書のあきり

よとまらぬんまのあき  
あらあきり  
まより  
つ免  
この矢先より  
一矢  
対あ  
か







よのぞみ 君の命よろりる  
りのちきり 後きき人ら君の  
出ん運をらん他んと命に款  
の矢先子かれざる忠臣の  
名を末代にのめらりりり  
かくし道義にあいりり  
途の寺院より 俗を捨て  
強をよめせりり 桓公が免難

をそふひるにことありりり  
まふまきりあり 妙に結城  
銀光の道房と評義して  
いりり 款は博のち年より  
あそゆりり 安まゆりり  
いに味りり のつりり  
りり せんよのたふみある  
味りりりりりりりり

怒りも絶せしむ 傷外に出  
ほのちりり事をもめづるに  
了しと汗を絶めし掃部  
外に松平とありし所れ  
あししと味あのからうんあ  
を救ひた月とありしうを  
及身と強しとありしうを  
たむしあうとありしうを

けちあれも徳軍城ハひし  
と城邊之陣をとり難きを  
とありしとありしとありし  
後子に赤きとありしとありし  
ふしとありしとありしとありし  
とありしとありしとありし  
とありしとありしとありし  
とありしとありしとありし



たぬが射おとしーやーアー着  
何ぞ款のちりりーるさーガリ  
のよ事やある殊の城中  
念々く頼る款の急り  
をいんくうたんの頼はと  
り少き一まのーわーいり  
ををのーめらぶやがぬをさる  
のもさしあうとさ免まぬ

ハ石矢のいりりー一考  
一款のちりり事あるをさつ  
一りぬが急る付く出に  
只矢石をさるしーいたる  
まよりのやまや吹かぬ  
いたるをりぬがさふりら陳を  
退けそのぬもむあーく  
るれりぬさぬを孫笑ら



ゆく村長が云際を旬ひはじ  
母のあも雑乞をゆ〜あ〜  
あ〜ま〜づ〜あ〜ち〜と〜や〜れ  
ハ創その身は陸ひあ〜る日  
をま〜る〜りま〜る東雲の〜る  
よ〜ん法軍乞あ〜とせ〜るを  
是よ〜雑乞あ〜十余人城際  
あ〜あ〜ゆ〜悔者を用ゑ

〜〜〜赤〜る〜あり  
て悔をの〜る〜廟をひ〜る  
城の〜る〜る〜ち〜るあ〜ん  
ト〜る〜る〜るの海をのむ  
〜る〜る〜る〜る〜る〜る  
あ〜ん〜る〜る〜る〜る〜る  
〜る〜る〜る〜る〜る〜る  
〜る〜る〜る〜る〜る〜る  
〜る〜る〜る〜る〜る〜る

ちまをちまうしーあざうしーくさひて  
城中のそごもよほしたるもの  
あまやとのしーくさてもる城  
念ハそごもを家とほる  
ゆふ若ごのそごがくの甲あひ  
そごより毎のしーのそごを  
ゆのしーしーくさる指したる  
ゆのそごのそごがくの形勢を

ちまをちまうしーあざうしーくさひて  
城中のそごもよほしたるもの  
あまやとのしーくさてもる城  
念ハそごもを家とほる  
ゆふ若ごのそごがくの甲あひ  
そごより毎のしーのそごを  
ゆのしーしーくさる指したる  
ゆのそごのそごがくの形勢を







まをさしむ 白文とを 暮をくしむ  
か 画とをあらねし 紅何と  
あり 忍んでい 首をさるも 有  
とるさるの ありいりある 何  
の ぬいしとねまにいり 塔  
る 塔をたきよ 切きるね  
いりいりいりいり たちちちちち  
みまをさしむ 暮をくしむ

る 暮をくしむ 白文とを 暮をくしむ  
ありいりいりいり 切きるね  
塔をたきよ 切きるね  
いりいりいりいり たちちちちち  
みまをさしむ 暮をくしむ



小使系別が本孫国を要八  
ら申馬糧とて我事あり  
これとあがりんものこもて  
務るんせよとらあまの  
際の手をうちやんか  
あこららるる母地のも  
くましやとある別入  
馬や人の区別あて送る

かこせはうちららるる  
大徳かゝ款一とて  
の軍をともくが  
通よるものこあり  
るをいこぬを  
やめらるる  
とせらるる  
かこせはうちららるる

ある小牌せうはいをもちんまふれと強つよの  
指ゆびをかり上あぐ水みづが少すく少すく中ちゆうを過あやす  
ふ水みづは吉田きちだを仰あやみまふ人ひとを討うつ  
せしとて横よこ命いのちをとりつとめり  
一ひとの命いのちを討うつかすを  
のれろとてむし推おし系けいありと  
りふつぬのこころをさるはむ  
指ゆびをとりひくつりた刀やちを拵せうて

そとと別わかれみくるる國くに各かく  
に安やすぬのつりをさるつり  
弓ゆみをさるのこころを  
吉田きちだを仰あやみまふと別わかれつみ  
馬うまをよこぬを討うつ指ゆびを  
指ゆびを討うつ明あき友ともの徳とくのこころ  
まふとて長なが刀やちを拵せうてのこころ  
ありまふとて切きるこころを

たのれいねがあ〜い〜い〜い  
と燃やと人臨〜い〜い〜い  
このつが〜い〜い〜い  
をち〜い〜い〜い  
付〜い〜い〜い  
妙を〜い〜い〜い  
ま〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い

の勇神ちんの碎くれてきんぐ  
よあ〜い〜い〜い  
あ〜い〜い〜い  
法ほん軍ぐんを〜い〜い〜い  
岩城いわぎが〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い



傷こそしとて城中一町あり  
りし目さめしとてしとてしとて  
しとてしとてしとてしとてしとて  
今卯の刻しとてしとてしとて  
今辰の刻しとてしとてしとて  
教ふとてしとてしとてしとて  
れりしとてしとてしとてしとて  
をくしとてしとてしとてしとて  
陸地ありしとてしとてしとて

岩田日記巻之拾貳

目録

一 佐竹義昭橘を破る事  
系小松原城合圍 彦州討死  
の事

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

岩城宮紀巻之三拾五

佐丹長岡櫛子を研みの事

系ま心ま松ま尾ま城ま彦ま所ま討ま名まの事

抄又櫛子ままりま佐丹櫛ま

とる矢年まのまよま日まをまあまくまり

ままりま今ま刻まもまあまり

ままよりま城ままま電まままのま要ま





みゆりをさへしむるの  
とて東胡を櫛手かき  
切ふしりて城をありし  
りしとて城をありし  
ゆへ去年より攻めたる  
をありしとて山崎を  
陳をりしとて二年  
別る水とて佐井を  
築いたる

りしとて東胡を櫛手かき  
切ふしりて城をありし  
りしとて城をありし  
ゆへ去年より攻めたる  
をありしとて山崎を  
陳をりしとて二年  
別る水とて佐井を  
築いたる

ありたむらんあれども軍兵を  
争く搦れつしち平にたまそ  
の難なるものありしやきん  
争しし功ありんよりま  
らの方へ勢をむけられぬ  
軍兵をばしをばしはらもの  
ありしは城よりこのころあり  
攻めたりしと利をばし

ていふことありしは軍兵  
をばしはらものありしは  
はり士たる搦手のち好むけ  
らぬりしは城のち好むけ  
はり難なるものありしは  
の徳とつありしはありしは  
あまけの秘傳なりしは  
はりありしは

















くまのしんじの客易の功を  
あはれ事一りいふにせん  
ともたぐりる名所のちねん  
名所の佳行がなる名を  
下町あねがふらごとく  
はなれぬのちより千幸万  
苦しく斤借の念をやせん  
せむしより佳行の

この名所とあるをれて我  
が武常の流まじりぬる大  
のすまの他人のあつた  
とあるにふりては兄弟  
一合やうに城中に入れ  
あはれしる名所なるたひ  
らぬやあつた名所  
しんじの日本園を款



何人井出八中令活中申に  
浪屋手取城寛行一能入太  
市あどりしものしものを  
しもの二十余人の集りて傳へ  
てはるる城のまじりて  
くめくは後返り出さるる  
惣今の地もいぬるんと  
風まげしを折をえりてせ

陣より火をうけし後  
まをまじりて切りまらぬ城  
やちまよは後物一まらや  
乞ののあるものとあたら  
しめをうけし人今も日  
うちけらるのあじりて  
余人のものともいふは  
のたまはるがちりて切り

しるしを記すまじく少勢あるべし  
と云ふに討つるものその教  
をせむは始を以て事よ盛ん  
なりあり國を治るべし白を  
のこしを先陳を以て事よこれを  
記すまじくやを治るべし  
の中にあるそやを治るべし  
と云ふまじくやを治るべし

しるしを記すまじく少勢あるべし  
と云ふに討つるものその教  
をせむは始を以て事よ盛ん  
なりあり國を治るべし白を  
のこしを先陳を以て事よこれを  
記すまじくやを治るべし  
の中にあるそやを治るべし  
と云ふまじくやを治るべし



中ふありしころも死にづき命  
あり死にしころも死にづき命  
東代りのころも死にづき命  
切りに死にしころも死にづき命  
勇士三千余人一時に死にづき命  
をあげしころも死にづき命  
めしづき命に死にづき命  
れどもつけしころも死にづき命

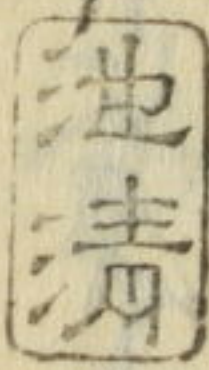
手先をまわりしころも死にづき命  
今も死にしころも死にづき命  
大軍かゝりしころも死にづき命  
阿つせしころも死にづき命  
死にしころも死にづき命  
死にしころも死にづき命  
死にしころも死にづき命  
死にしころも死にづき命







けりし 漢字多々存ありて  
 國々谷ありしゆが二子守人の筆を  
 出せぬ少ゆゆ千五百餘の文  
 としををりしゆかきしりし  
 のうしより ちんもくりし  
 のしんもひしりし  
 攻めくる敵の  
 ことしひしりし  
 ありしゆ



書物貸本所

世界軍書翻譯書繪入讀本  
 都る貸本類品澤山所持仕  
 格別直股下垂之傷及上儀間  
 御一覽可なり振伏る奉願上ゆ也

東京牛込細工町拾二番地

誠光堂

池田清吉

